

桜蔭俳話会 十月句会 (第三四九回)

平成二十八年十月三十日(日)

大磯の城山公園及び旧吉田邸で吟行。句会場は鳴立庵。

三陸の浜菊想ふ大磯路
添削三陸の浜菊いかに大磯路

直子

振り向けば宰相の世の秋薔薇

明美

鑑賞・回顧、回想というありきたりの心の動きを、「振り向けば」という人の体の動作に置き換えたのが良い。

鳴立の沢の流れや秋深かし

ツル子

鑑賞・小流れにも秋の深まりを感じたという。鳴立庵への挨拶。

秋の薔薇きのふの雨をとどまらせ ヤエ子

鑑賞・従来からある表現であるが、当日の薔薇園の有様を活写している。これから作者の俳句の世界が始まる。

秋気満つ檜皮葺きなる兜門

明美

鑑賞・「満つ」の中に気力充実した時期の宰相吉田茂を感じ取れる。

秋風に揺れる蜘蛛の巣破れなし

眞壽

添削・「海風に揺るる蜘蛛の囀破れなし」として、夏の句に。

石仏の薄るる文字や秋寒し

ツル子

鑑賞・伝統的な作り方であるが、「薄れる」と「寒い」が効いている。

吟行や郁子の実の坂かけ下る ヤエ子

添削・郁子の実や吟行の坂かけ下る

晩秋や世界睥睨吉田像

幸

添削・晩秋の世を睥睨の吉田像

秋の風ひらひらと葉落ちもせず かおる

添削・秋風や揺るるひと葉の落ちもせず

天を突く大樹の先の秋の空

ツル子

添削・天を突く大樹の梢雁渡し

心字池澄めり逆さに映る塔

友子

添削・水澄むや塔の影浮く心字池

カラス瓜城山庵に造り滝

直子

添削・烏瓜城山庵の造り滝

一望の相模灘なり薄紅葉

幸

添削・一望の海半島の薄紅葉

地下水の吹き出でたるや秋の庭

かおる

添削・源は地下にありけり秋の池

秋の日の葉巻の煙り遠きあり

ツル子

添削・ありし日の葉巻の煙り鴉日和

マリアカラス秋冷の庭香り聞く 直子

添削・秋冷やマリアカラスの香り聞く

茶室よりもるる明りや烏瓜

友子

添削・茶室より漏るる声あり烏瓜

島々の雲にとけあふ秋の潮

ヤエ子

添削・秋潮や雲に溶け入る沖の島

灰色の波頭立つ秋の空
添削・秋天やなほ灰色の波頭

眞壽

坂道に黄色く灯す石路の花

眞壽

葉巻持つ銅像にこやか海桐の実
ヤエ子

添削・坂道の角を照らして石路の花

添削・葉巻手に像のにこやか海桐の実

秋の富士見てゐる杖の翁像

明美

吉田郷とべら実の上先を読む
直子

添削・初冠雪の不二を背にして吉田像

添削・先読みし吉田茂や海桐の実

秋の空はるかに煙る相模湾

眞壽

火に負けず古木健気秋の庭
幸

添削・秋空の裾を煙らせ相模湾

添削・火に負けぬ松の古木や秋の園

磯菊のみどりのつぼみ多かりし

ヤエ子

秋の日や葉巻持ちをり吉田像
かおる

添削・磯菊のみどりの蕾風荒し

添削・秋冷や葉巻絶やさず臣茂

下へ下へ展望台の秋の蝶

友子

海見つむ像の宰相鳥渡る
友子

添削・展望台の裾を伝ひし秋の蝶

添削・海へ向く宰相像や鳥渡る

石垣をつたい歩くよ蔦紅葉

眞壽

城山の潮の香るや石路咲きぬ
ツル子

添削・石垣の風の荒さや蔦紅葉

添削・城山の潮の香まとひ石路の花

そぞろ寒野球声援広がりぬ

かおる

(文責代表 増田守 不在投句 古野明美)

添削・グラウンドの声を遥かにそぞろ寒

大石や乗り継ぐごとし秋あざみ

かおる

添削・大石に抱へられたる秋薊

初冠雪のニュースや富士は雲の影
友子

添削・初冠雪の報あり不二は雲の陰

城山の門建物多き秋の中

幸

添削・城山の門の幾つや薄紅葉

水澄みて錦鯉の景目裏にあり

幸

添削・水澄みて何か言ひたげ鯉の口